

イベントレポート

大学生国際問題討論会 2010

去る二〇一〇年九月二六日(日)、文京シビックホール(東京都文京区)にて開催された外務省主催「大学生国際問題討論会二〇一〇」に本大学院一回生の久後翔太郎君と田中英徳君(本誌編集委員)が「楠葉会チーム」として出場し、見事外務大臣賞の栄冠を勝ち取った。

この討論会は、日本の将来を担う大学生・大学院生が、我が国の外交政策や国際情勢に対する関心や理解を深めるとともに、国際社会に主体的に関わっていく際に必要なディベート能力を養うことを目的に、外務省が毎年開催している。本年度は、「日本政府は、すべての主要国による、公平かつ実効性のある国際的な枠組みの構築と意欲的な目標の合意が得られなくても、二〇二〇年に一九九〇



決勝戦で議論を展開する久後君(左)と田中君(右)

年比で温室効果ガス二五%削減に向けた措置を講じるべきである」という論題が提示され、高村ゆかり龍谷大学法学部教授など三名が審査委員をつとめた。全国の大学から二〇チームの参加登録があり、肯定側での立論書による書類選考の結果、本大学院「楠葉会チーム」の他、「早稲田大学国際関係論河野ゼミチーム」、「立教大学佐々木ゼミチーム」、「神戸大学チーム」の四チームが討論会本戦への出場権を得た。なお、楠葉会チームの肯定側立論書作成には、本大学院一回生の竹中良企君も参加し、本戦出場に貢献した。

討論会本戦は、まず準決勝二試合が行われ、

それぞれの勝利チームが決勝戦に臨んだ。本戦では、選ばれし精鋭たちによる白熱したディベートが繰り広げられた。

楠葉会チームは、準決勝第二試合で、神戸大学チームと対戦した。試合前のコイン・トスに勝った楠葉会チームは、論題に対する肯定側を選択。論題の実現には、原子力発電へのエネルギー構造の大転換が不可欠であり、そのようなエネルギー構造の大転換は、エネルギーの安定供給や世界における大きな市場獲得のチャンスをもたらし、低迷する日本経済の発展につながるとの論陣を張った。現在の火力発電による電力を賄うためにはどれくらい原子力発電所の新設が必要かということを緻密な計算で算出し、二〇二〇年までの具体的なロードマップも提示するという、具体性のある精緻な議論を展開した。一方、神戸大学チームは防戦に終始し、楠葉会チームが優勢に議論を進めた。結果、楠葉会チームが勝利し、決勝戦に駒を進めた。

決勝戦は、準決勝第一試合で早稲田大学国際関係論河野ゼミチームを破った立教大学佐々木ゼミチームとの頂上対決となった。またもや、試合前のコイン・トスに勝った楠葉会チームは、今度は打って変わって論題に対する否定側を選択。肯定側の立教大学佐々木ゼミチームは、資源の多角的な調達や国際社会における地位の向



トロフィーを掲げる久後君(左)と田中君(右)

上のために論題の実現が必要であり、そのために、原子力発電所の稼働率向上や太陽光発電の普及を進めるべきだとの主張を展開。それに対し、楠葉会チームは、肯定側チームの主張は論拠が薄弱であり、論題の実現に向けたロードマップが曖昧で具体性や実現可能性に乏しいと鋭く反論。論題の実現を目指せば、国際社会で日本だけが割を食うことになり、失敗したときに国際社会からの信用を失うという高いリスクを背負うことにもなると肯定側チームに迫った。審査委員も「甲乙つけがたい接戦」と評する激しい攻防となったが、最終的には我が楠葉会チームが激戦を制した。優勝した楠葉会チームの二人には、賞状とトロフィーが贈呈された。

久後翔太郎君の談話

大学生国際問題討論会二〇一〇を外務大臣賞受賞という結果で終え、非常に満足しています。

初めに、論題に対する肯定側の立論書提出が課題として与えられましたが、田中君も私もエネルギー政策や外交については専門外でしたので、当初は大きな不安がありました。しかし、本大学院での授業で習得した政策の企画・立案の技術を用いることにより、膨大な情報の中から必要な情報を精査し、それらの情報をもとに、実現可能性及び実効性という観点から最良の政策を立案することができました。

次に、討論で戦う相手の主張に対する反論を考える必要があります。これについては、相手が主張しうる政策をブレインストーミングから推測し、それらを自然エネルギー系と租税政策系に分け、分担することで効率よく幅広い分野について、カバーすることができました。これにより、討論会本戦では、相手の主張に対して適切に反論することができました。

本大学院において習得した技術を存分に発揮できたこと、及び努力が外務大臣賞という結果として報われたことに非常に満足しています。

田中英徳君の談話

大学院の先輩からの告知のメールが大学生国

際問題討論会二〇一〇を知るきっかけでした。

大学院に進学したのだから、講義をこなし淡々と単位を取得するだけでなく、積極的に課外活動にも参加したいと考えていた私にとってはい機会となりました。幸いにも国際問題に興味がある久後君と竹中君がいてくれたおかげでチームを組むことができました。

実際に、事前提出の立論書の準備では、地球温暖化について一から勉強する必要があり苦勞しました。発電量や排出量などなるべく客観的なデータを使うことを心掛けました。締切り前には私の家で合宿も行いました。

こうした努力が報われて本戦出場が決まりました。決勝で外務大臣賞受賞が決まった時もあることながら、個人的には立論書が評価されたことがより嬉しかったです。ディベートの如何で決まる本戦と違い立論書の作成は政策立案そのもので、本大学院での経験が生きたと感じました。最後に良い経験ができたことに対し、チームメイトに重ねてお礼を言いたいと思います。

久後君と田中君の外務大臣賞受賞については、各方面から称賛の声が寄せられ、京都大学総長賞に値するとの声も聞かれる。本大学院の歴史に燦然と輝く成果をあげた二人の今後の活躍を期待したい。(文責 長谷川智史)